

令和元年度 栃木市教育研究所研究員研修会 研究記録カード

1 部会名	授業づくり		部 会
2 研究員 所員 ◆：代表者	◆ 野口 恭平 ・老沼 晃子 ・馬場 絢	・吉原 智久 ・渡部 智裕	所員 ・金井 聡子 ・手塚 浩史



3 研究テーマ

すべての子どもが、「できた!」「わかった!」を実感できる授業づくり

4 研究の取組

(1) 研究内容

- 授業づくりで考えていること
 - ・ いろんな「できた!」「わかった!」がある。
 - ・ 今まで学んだことを活用し、少し難しい課題に挑戦できる授業づくりを心掛けている。
 - ・ どんなときに子どもが学びたくなるのか。
 - ・ 学力差の大きい子どもたち（特に、下位の子の引き上げをするため）に、どのような手立てがあるか。
 - ・ 自由交流を行い、話し合いを通して人間関係が良好になった。
 - ・ 学びの個別化から困っている人を助ける仕掛け。教師の役目はコーディネート。

(2) 研究計画

月 日	研修内容	月 日	研修内容
5月13日	研究テーマ・内容の協議、計画作成	1 1月下旬	吉原先生授業研究会（東中理科）
6月25日	研究テーマ・内容の協議、計画作成	12月10日	研究内容協議
8月28日	野口先生研究授業指導案検討 渡部先生研究授業ビデオ視聴（1年数学）	2月6日	研究内容協議
9月10日	野口先生授業研究会（南小6年算数）		
10月17日	研究テーマ・内容の協議 吉原先生研究授業指導案検討	2月21日	1年次経過報告提出

5 研究の成果と課題

(成果)

- ①2回の研究授業を実施・参観し、「全ての子ども」が「できた!」「わかった!」を感じることができるようするには、授業を一単位時間ではなく、単元をととしたものとして捉える必要性があることが改めてわかった。
 - ②子どもたちへのアンケート結果から、「できた!」「わかった!」にはレベルがあり、我々が求める「(本質が) わかった!」と子どもたちの「(答えが) わかった!」に違いがあることが分かった。
 - ③クラス内での学力上位層、下位層への児童への支援として、子どもたちが関わり合える環境を作ることによって、それぞれの課題をそれぞれが学びやすい手段を選びながら解決していくことができる姿を見ることができた。
- (課題) 目指す姿は明確になってきたが、深い理解を促すための具体的な手段はまだ不明確である。

6 さらに研究していきたいこと・次年度の構想

今年度、研究をとおして得た知見を実践可能なものに落とし込むために、次年度は単元をとおして「わかった!」「できた!」を子どもが感じることが必要な手立て・工夫や、子どもが本質的に理解するために必要な手立て・工夫について考え、実践していきたい。